



# 漁村に生活してわかった 漁港の「いのち」

佐藤 力生  
漁業従事者



世の中には、多くの公共事業がある。しかし、実際に漁村に住んでみて、漁港には他の公共事業とは違う、なにか人間と融合しているというか、構造物でありながら、生命感を感じるものがある。それは、「重要性」とか「多面的機能」などという、平板な言葉では語りきれない「いのち」ともいえるものである。

漁港は単なる漁船の係留場ではない。そこは、地域住民の仕事、生活、交流などの場であり、なにより、漁港なくしてはその地域そのものが存在できない。このこと

に気付くと、やはり、このような多様かつ絶対不可欠の存在感を持った公共事業は、他にないような気がする。偶然ではあるが、私が住んだ三重県熊野市の典型的な漁村「甫母（ほぼ）町」の「ほぼ」とは「つつみこむ」という意味らしい。住んで初めてわかるが、漁港とは地域を抱擁する母なる存在と思う。

## かつての漁港部に対するイメージ

私は、昭和51年に水産庁に入庁した。同期には、この広報誌の出版元である、「漁港漁場漁村総合研究所」の影山智将理事長がいる。今では、かたや理事長、かたや漁業従事者と、だいぶ差がついてしまったが、仲よくおつきあいをさせていただいている。

入庁後の漁港部(当時)に対する印象は、同じ水産庁にありながら、「別格」だったような気がする。今でもよく覚えているが、ある象徴的な出来事があった。昭和



甫母の集落



甫母漁港看板

さとう・りきお

1951年生まれ。最終学歴 東京水産大学(現:東京海洋大学)増殖学科卒。1976年4月水産庁入庁。2002年10月水産庁管理課資源管理推進室長。2004年4月水産庁水産経営課指導室長。2007年7月水産庁漁業調整事務所長(境港、瀬戸内海)。2009年4月水産庁栽培養殖課漁業資源情報分析官。2012年3月水産庁退職。2012年5月三重県(熊野市、鳥羽市)沿岸漁業手伝い。現在に至る。

50年代の中頃だったと思う。Mという大変気さくな長官がおられた。酔っぱらうとネクタイを頭に巻いて、鼻の穴にタバコを差し込み、宴会場のテーブルにあがり踊り始める。今では考えられない良い時代であった。そのM長官が水産庁の中央会議室前の廊下に立ち止まり、首をかしげながらジーと見下ろしている。その足元には、膝を折った姿で前かがみになり、廊下に直接置いた書類に何か懸命に書き込んでいる出張者らしき人がいた。M長官は、「うーん」とうなりながらゆっくりと振り返り、たまたま後ろにいた私に向かって、ひとりごとのように「漁港部は…すごい…」とため息まじりにつぶやいた。私も黙ったままであったが、思わず何度もうなずいてしまった。

おそらく、それは市町村の漁港担当者であったのだろう。事業ヒアリングで指摘を受け、大慌てで書類を訂正していたのかもしれない。そこには、卓球台もあったが、すでに満員。やむなく廊下を机代わりにせざるを得なかった。それにしても、地方からの出張者に、物乞いのような姿をもさせる漁港部の力はどこからきているのか。水産庁予算の2/3を占めていた漁港予算の力、すなわち金の力とは、すごいものだ。それが、かつての漁港部に対する単純なイメージであった。しかし、実際に漁村に住んで、現場でしか体験できない出来事に触れていくと、漁港に対する考え方が大きく変わり始めた。廊下にひざまずいたあの出張者の真剣さは、金がそうさせたのではなく、地元漁民の思いがそうさせたのであった。

## 子供の歓声を生む漁港

私の住んだ甫母は、約150人の人が住んでいたが、子供は一人もいなかった。移り住んで2か月たった7月下旬であったろうか、港の近くの空き家を借り、その2階で休んでいた私の耳に、港の方から子供の歓声が聞こえてきた。久しぶりの子供の声である。おそらく夏休みでお孫さんが帰ってきたのであろう。以前であれば、「やかましい」であったかもしれないが、「なつかしい」というか「心が和む」というか、今まで経験したことのない不思議な感情を抱いた。おそらく、人間はこれまでずっと、老若男女に囲まれて集団生活を送ってきた。そこに高齢者だけの生活が始まると、無意識の中にそれに対する渴望感というのが生じてきたのかもしれない。

実は、私が、この日本の高齢者だけの過疎という現象

の深刻さを改めて思い知らされたのは、今年の2月に、カンボジアの首都プノンペン郊外の漁村を見学した時であった。そこでは、かつてポルポト政権による大虐殺で大人が殺されたため、高齢者の人がほとんどいなかった。日本の過疎の村と全く逆なのである。しかし、彼らの村には未来がある。カンボジアの人に、この消滅しそうな高齢者だけの村はどう映るのだろうか。これが高度経済成長をなし遂げた豊かな国のしたことかと。とても恥ずかしくて説明できない。農山漁村の過疎地に、大虐殺にも似た異常な人口構成をもたらした日本の経済政策は、絶対に間違っていると確信した。

はなしを元に戻す。久しぶりの子供の声に誘われて港に出てみた。そこには、まだ幼稚園の年齢にも達していないような幼い子供二人が、母親の監視のもと浮き輪をつけて泳いでいた。その場所は、漁船のメンテナンスをするための船揚げ場（上架施設）の下であった。もちろん施設の目的は違うが、だんだんと深くなっていくそのスロープは、小さな子供が泳ぐには絶好の場所であった。海が目の前にあるからといっても、どこでも海水浴ができるわけではない。一度、岩場から海に入ろうとしたが、波が打ち寄せ危なくて海に入れない。思い切って海に飛び込んでも、今度は海草の生えた岩場につかまれず、うまく上がれるかどうか分からない感じである。「砂浜で泳げば」と誰もが思うだろうが、意外と砂浜は少ない。あったとしても、沖出しの潮流が強いと「遊泳禁止」の看板がある。熊野には三重県内でも有名な「新鹿（あたしか）」という海水浴場があるが、それすら10キロ弱離れている。漁村といっても、手軽に海につかれる場所、とりわけ小さな子供が安全に泳げる場所は意外に少ないのである。

さらにいえば、シケで海水浴場では泳げなくても、漁港内では波も静かでも安全に泳げる。すでにどこかにあるかもしれないが、ぜひ漁港機能の一部に子供向けの海水浴場を設けてはどうか。それが楽しみで多くのお孫さんが戻ってこられるし、例えば民宿をしているところでは、集客に役立つかもしれない。子供の歓声を生むのも漁港の機能の一つといえよう。

おまけの話。私の故郷の大部分から、夏休みに子供達が遊びに来た。そこで泳いだとき、子供達が不思議があったことがある。それは、初めて見た「うるみ現象」である。甫母港の一番奥にきれいな小川が流れこんでいる。おそらく、淡水と海水が混じり、温度差なのか密度差なのか

わからないが、海水が2層に分かれ、それを水中メガネで見た子供達は、「いったいこれはなんだ」となったわけである。本物の海や川ではなかなか出会えない、科学の勉強にもなるというおまけ付きの機能である。「うみ現象が体験できる〇〇漁港」もなかなかのキャッチコピーかもしれない。

## 家族の絆を結ぶ漁港

高齢者だけが住む漁村で何よりの楽しみは、子や孫の帰省。1人のおばあさんが住む家に、子や孫が同時に17人も帰ってきた例もあり、まるで民宿並み。盆や正月

には人口が3倍以上に増えることから、熊野市役所からの「節水協力」のアナウンスが、町のスピーカーから流れるほどである。海と山との間の狭い土地に家が密集した漁村には、駐車スペースは少ない。U型をした港を取り囲むように国道（といっても、あぜ道より少し広い程度で軽自動車同志ですら、すれ違うことにひと苦勞）が通っているが、その少しでも余裕がありそうなところに、帰省の車が駐車する。当然それでは足りないので、漁港岸壁のエプロンも臨時的駐車場となる。家の2階から見た光景は、日ごと一変し、まさに車だらけで壮観そのもの。当然盆踊りも岸壁で行われる。さすがに、この時だけは会場となる部分の車は移動させられる。日ごろ見たこともない若い人達がいっぱい来て、地元のゆったりとした音調の音頭が繰り返され、同じ踊りが延々と続く。会場にいた甫母地区の区長さんに「みなさん、できればここに住みたいの shouldn't you」と聞くと、「仕事がありませんからね」とぼつり。

盆が終わると、毎日少しずつ車の台数が減っていく。あちこちで、おじいさん・おばあさんが、「また遊びに来なさいね」と、車の窓から手を振っている孫との別れを惜んでいる。「高齢者ばかりの静かな村に、また戻るの



左上：船揚場（上架場）、右上：狭い国道、左下：臨時的駐車場（正月）、右下：テント小屋の骨組み

か」と、こちらもわびしくなってくる。ふと気づくと、全く子供の声が聞こえなくなっている。それに代わるように「ツクツクボウシ」が鳴き始め、港に秋の気配がはじめる。イセエビ漁の解禁（10月1日）も、もうすぐである。

もし、ここに漁港がなければ確実に帰省する子や孫は減るであろう。漁港は家族のきずなを結ぶ場づくりの役割も果たしているのである。

## 生活空間の一部となる漁港

イセエビ漁が始まる1週間前ほどから、夏には臨時駐車場にもなった岸壁に、刺し網からエビを外し、その刺し網をつるし、修理するなどの作業用のテント小屋が作られ始める。昔から、漁業者ごとにその区画が決まっている。これから約半年間、一日の大部分をそこで過ごすのである。テント小屋の下には、必ずシートが張られる。それは、刺し網にかかった海藻やごみを外した後、ほうきで集めるが、でこぼこがあるコンクリート面のままではゴミがきれいに掃けないため、シートは不可欠。ところが、そのシートも漁期の終わりの翌年の4月ごろにな

ると、ボロボロになり、あちこちガムテープで修理が必要となる。

それは、イセエビ漁の半年の間、家では寝る・食べるだけになり、沖に出る以外のほとんどの時間をこの小屋で過ごし、長靴との摩擦などで、擦り減ってしまうためである。このテント小屋は、単に仕事の場というだけでなく、地域の交流という側面も含めいろいろな意味を持つ。網の修理をしながら、両隣の人といろいろな話をし、誰かれなく小屋の前を通る人とも話しが始まる。日ごろは道で会って挨拶を交わす程度であった方々に、私のことも多く話したし、皆さんのこともいっぱい聞いた。また、親せきが来てお土産をもらおうと、そのおすそ分けがいただけた。珍しい魚がかかるとその料理の仕方も教えてもらう。

港には、イセエビ漁を営む全ての漁業者が一堂に会す。反対側の岸壁で、仕切られたテント小屋ごとに夫婦や家族が働いているその光景は、なにか「ドールハウス」のようにも見え、各家庭の居間がそのまま漁港に移ってきたような感じさえる。もっと徹底していたのは、鳥羽市の石鏡（いじか）漁港でイセエビ漁を体験した時に出会った網小屋である。それは、天井だけでなく、側面も完全にシートで囲われていた。まず長靴を脱いで上がる、こたつがある、調理道具もある、布団すらおいてある。そう、完全に漁港が漁業者の生活空間の一部にもなっているのである。

実際に毎日毎日漁港に出てテント小屋で仕事をしていると、その仕事場の空間が、自分の家に帰ってきたときのような、なにか「ほっとする」感じすらし始めるのは不思議なものである。ここまで徹底して地域住民の仕事や生活と一体化した、公共事業施設は他にあるだろうか。ちょっと思いつかない。漁港というのは、本当にありがたいものと思えてくる。

## 生活環境整備があつてこそその漁港事業

昔、漁港部（当時）が漁村の生活環境整備事業を行っているのを知り、海の役所がなんでそこまで手をつけるのかと思った。実際に漁村に住んで認識不足を恥じた。私が住んだ借家は、階段状に張り付くように建てられた3軒の家の一番上。中型の冷蔵庫を運び込もうとしたら、石段が直角に曲がったところであつた。最後はなんと

かなったものの、もし大型冷蔵庫を買っていたらとぞつとした。私の家が3階相当とすれば、10階くらいのところにも家がある。若い人でもたどり着くだけで、膝が笑う狭い石段を、高齢の方が一段ずつ荷物をおいては昇っていく。広い庭先を持つ農家とはまったく造りの異なる漁村集落の苦勞である。

それでもまだ甫母地区は良い方。熊野漁協の本所のある遊木（ゆき）地区やその南に位置する磯崎（いそざき）地区は、もっと高いところにも家がある。そこにいた漁業者の奥さんに、毎日こんな階段を昇り下りするのは、大変でしょうねと尋ねたところ「こんなのはまだよいほう」と昔の苦勞話を聞かしていただいた。今はサルヤシカが荒らしまわるので、その面積も少なくなったが、その家のさらに上にある山の段々畑で自家用の野菜などを栽培していた。そこに肥桶を頭の上へのせ、一段一段運び上げることが一番つらかったと。

しかも、それは女性の仕事だったとのこと。もちろん「ポッチャン便所」の時代の話である。私は、それを聞いてしばらく声が出なかった。私も子供の時に、遊び半分で親のまねをして、肥桶を天秤棒の前と後ろにぶら下げ畑まで運んだ経験があるが、それが狭い石段ではできない。ただ、ただ、漁村で生きることの厳しさと、それに耐えてこられた漁業者の皆さんの苦勞に頭が下がる思いであつた。

私の借りた家も



住宅へ上がる階段



山の畑に上がる階段

「ポッチャン」便所であった。子供のころ以来の久しぶりのご対面であるが、今さら水洗便所の快適さを思い知らされることになった。敷地内に浄化槽を設置するスペースもないため、今もって多くの家が海にやさしいエコ便所。経験のない若い世代、特に女性には相当の抵抗感があるらしい。新たな世代に漁業を引き継ぐためには、集落環境をできるところから快適にしていくことが、ぜひとも必要と思う。漁港整備とは、「海岸部+集落」の一体的な整備ということが、実際に住んでみるとよくわかった。実態を知らないで「なんで海の役所が…」など理屈だけの無責任な発言することが、いかに当事者を傷つけ、その苦労に報われないことになっていたのか猛省した。ごめんなさい。

## 意外と空いていない漁港

漁船の隻数がずいぶん減ってきたので、漁港も空いてきたのだらうと思っていた。甫母港もかつてのピーク時に比較すると半分以下の隻数になった。甫母港では岸壁に対し、船の頭を向けて係留する。隣の船と十分な間隔があるので、離岸接岸するのも簡単と思っていたが、そうではない。その時の潮流次第では、隣の船が横に押され、こちらの止まるはずの位置を塞いでいる。そういう時には、その船にまず飛び乗り、岸壁に揚がってもやいを引っ張り定位置に戻すか、竿でその船を押してからでないと接岸できない。昔は大変でしたでしょうねと聞くと、入港が遅くなると船をかき分け、かき分けの状態で一苦労だったとのこと。外からみれば、ぎっちり漁船が並んだ

漁港は見栄えはするが、使う身になれば、空いているくらいがちょうどよい。

もう一点気づかされたことがある。甫母港は、台風時には、熊野の山に降った大量の雨水が湾奥にある小川から一気に流れ込むため船が係留できない。そこで、近くに避難港を作ってもらった。では、その避難港は日ごろは何の役にも立っていないのであろうか。決してそうではない。その岸壁は、定置網や養殖の網替え時の際の網干場や、破損した網の修理場として利用しているのである。現に避難港の岸壁は、いつも網や資材でいっぱいであった。おそらく、何も知らない人が見れば、「漁港に船がガラガラで、無駄な漁港」と思うかもしれない。しかし、もし、甫母で避難港がなければ、定置も、養殖も廃業しなければならない。ちょっと見て「俺は現場を見てきた」といわれたのではたまらない。

## 漁港あつての漁業

私の住んだ甫母地区は、合併して熊野漁協となるまでは、「甫母・須野」漁協に属していた。「須野」とは、甫母からおおよそ2キロ尾鷲寄りの、熊野市の一番北はずれにある地区の名である。なんと、その地区には、18軒のうち住民が住んでいるのは2軒のみ。昼間でもシーンと静まり返り、お住まいの人には申し訳ないが、何か不気味ささえ感じる。しかし、よくテレビに出てくるような、限界集落の朽ち果てボロボロになった廃屋は一軒もない。庭には草もはえておらず、ちょっと見ただけでは、人が住んでいないようには見えない。それは、何を意味する



避難港におかれた資材や網



須野のきれいな空き家

のか。おそらく、今も旧住民がときどき戻ってきては、空き家の手入れをしているためであろう。心ならずもこの故郷を離れて行かざるを得なかった方々の心情を思いやらざるをえない。

この地区の住民は、もともと林業と漁業を生業にしてきた。それがここまで衰退した主な原因は、外国材の完全自由化により、林業では生計がたてられなくなったこと。それから、漁港がなかったことであろう。ここで漁業を営んでいた方は、甫母港を利用していた。しかし、自分が漁業を手伝って分かったが、たとえ車があったとしても、2キロも離れたところを一日に何度も往復しては、とても体が持たない。こまごまと手間のかかる沿岸漁業は、職住が近接して、初めて何とかやれるものなのである。須野地区の前浜の景観が素晴らしいだけに、間もなくここが消滅してしまうとすればまことに残念である。後で触れる尖閣問題も同じであるが、「ここに漁港さえあったなら…」である。

東日本大震災による津波からの復興で、漁港を集約せよとの意見が多くあった。おそらく、私も漁村に住まなかったら、そのような意見に賛同したかもしれない。しかし、これは、陸からの発想であり、決して海の現場からではそのような結論に至らない。それはしげ気味の時に海に出ればすぐわかる。湾内は静穏でも外海にでれば波が高く、とても安全に航行できる状態ではない。そういう時に、外海に出て岬をかわし集約された港との間を往復することはできない。それから、船は車よりずっとおそい。一日に何度も漁場と港を往復するような作業では、仕事にならない。少なくとも、内湾に多い養殖業や小型定置網などでは、作業の日数や効率が大きく抑制されることは間違いない。

また、山と海とに囲まれたそんな狭いところに住まないで、津波の被害にもあわない高台の広い土地に住めばよいではないかという意見もあるが、これも陸からの発想。他人にいわれなくても、すでに述べたように、漁村の生活環境の不便さはもちろん、津波の怖さも十分知っている。それでも代々そこに住んでいるのは、港が近くにあって初めて漁業が成り立つからである。

魚がいるから、漁業者が住み、だから漁港がある、ではない。全くその逆。漁港があるから、漁業者が住み、だから魚が獲れる。これが真実。漁港なくして漁業は成り立ち得ない。そこがわからない方々が、漁港を集約せ

よとか、高台に住めとか、偉そうにいつている。まるで以前の私のように。

毎日海に出て、必ず何かを与えてくれる海のありがたさというものを痛感した。また、今は流通に乗らなくなった低利用魚や未利用魚がこんなたくさんあがり、それが意外にもおいしいことに驚いた。新たに増やせとまでは言わないが、今ある漁港は絶対に減らしてはならない。これさえあれば、万一の時に日本人に食糧タンパクを与えてくれる海に出られる。何ら現実を知らず、アメリカかぶれの目先の金や効率性などでしか物事を判断できない方々。全く将来の食料に責任を負えない口先だけの方々。とは心中はしたくない。いつまでも潤沢な外貨で食料を輸入できるというのは甘い。現に円安になっても輸出は増えず、水産物の国際価格は高まるばかりでないか。無知とは、将来に対する犯罪である。

## 現場から思う新たな公共事業の考え方

「無知で悪かったな。じゃーそのお金は一体どこから出てくるのか。無駄なものにお金を使う余裕などない」という反論に対して、3つの観点からお答えしたい。

### 1. 漁業を衰退させた輸出産業が負担せよ

漁村に来て最も感銘を受けたのは、若い人が出て行った後も、懸命に働く高齢の漁業者の姿であった。冬の夜の午前2時過ぎ、ドラム缶にくべた焚火で凍えた手を温めながら、刺し網からごみを外す隣のテント小屋の80歳に近いご夫婦の姿を見ていて、漁港は「無駄だ」という批判に対し怒りがこみ上げる。一体彼らが何の悪いことをしたのか。彼らが怠けたから漁業が衰退したのか。彼らには何の落ち度もない。日本漁業の苦境の最大の原因は、国内市場の半分をも占めるようになった輸入水産物の増加による魚価安。それは、自由貿易促進の見返りとして、外国から要求された国内市場の開放によるためである。にもかかわらず、水揚げ金額が減った、漁業者が減った、だから無駄であるという。これでは、人の足を踏んでおいて、お前は働きが悪くなった、だから給料を払うのは無駄だということと同じではないか。漁業が衰退した原因は「無駄だ」と批判するそちら側にこそある。

まして、犠牲になった見返りに日本全体が豊かになったならまだしも、輸出で儲けた金を300兆円も外国においてきたまま（対外純資産世界一）である。これでは、輸

出産業と外国人を豊かにするためだけに日本の漁業者が犠牲になったのも同然。輸出で儲けた金を、国内に還元させなければならない。だから輸出産業が負担するのは当然であり、その金も十分ある。

## 2. 無駄というのは視野が狭いから

ニュースで「尖閣問題」が報道されるたびに、あの島に漁船の避難港があって、沖縄の漁船などが利用していたら、そもそも中国が難癖をつけてくるのがなかったのではないかと思う。今となつては、中国との武力衝突を恐れる日本国政府に、港を作ることを期待することはまず無理であろう。では、仮に中国が難癖をつける以前に、漁港事業の申請は行われていたら、どうなつたであろうか。残念ながら「無駄！」の一言ではねられたに違いない。(その頃は、まだ沖縄返還前だった、という屁理屈はこの際ご勘弁いただきたい) この一つの例をとつても、「無駄」かどうかは、視野を広げることでいくらでも変わり得る。

ミルトン・フリードマンを教祖とする新自由主義に洗脳された規制改革会議の方々、この世はお金がすべてを解決するとし、アメリカのまねばかりしている。しかし、新自由主義が蔓延するこの世界で、今何が起きているのか。各地では紛争が激化するばかりであり、肝心の経済さえも低迷している。そろそろマネタリストの視野狭窄症から卒業したらどうか。

## 3. 天下普請的な公共事業への転換

漁村に住んでいろいろなことを学び考えさせられた。それが拙著『『コモンズの悲劇』から脱皮せよ』(2013年11月：北斗書房)を世に出すきっかけになった。衰退した過疎の漁村から我が国経済の現状を見て思ったことは、なんと18世紀のイギリス人の「寒村に行く」という詩の一節「富は積もれど、人びと窮し、荒廃・疲弊がこの地を襲う」に集約されていた。企業の内部留保と現預金の合計は470兆円、個人の金融資産は1400兆円もある。人間は何のためにお金を稼いでいるのか。お金とは貯めるものではなく、使うものではないか。私は、拙著で今の日本経済を「不幸になるために、豊かさ(成長)を求めている」と表現した。「無駄」という概念は、公共事業が経済成長を目的にするがゆえに生じてくるものであり、今後はそれを超越した新たな考え方が必要となっている。現に、地球温暖化による相次ぐ異常降雨などを見ていると、誰もがもう経済成長を望むべきでないと思わざるを

得ないのではないか。

では、どうするのか。そのヒントは、270年間という長期にわたるゼロ成長下でも、平和な持続的安定社会を実現した江戸時代の「天下普請」にあると思う。「天下普請」とは、江戸幕府が全国の諸大名に命令し、行わせた土木工事のことである。その裏の狙いは、大名が経済力をつけ(金をため込み)、軍事力を高めて幕府の脅威にならないようにするためであった。ところが、意外にもこれが「金めぐりの良い」経済構造を作り、270年間の安定に大いに貢献したという。同じく参勤交代もその沿道に多くの経済効果をもたらした。つまり、大名に「金をためさせない」経済政策が、持続的安定社会をもたらした秘訣ということである。

これを現在に置き換えると、グローバル化と規制緩和がもたらした、格差の拡大と富の偏在による「ためこまれた金」が一番よくない。現在の大名であるグローバル企業や投資家が、軍事力を強化し、国に刃向うのではないが、それに劣らぬ悪事を働く。まず、金持ちや金をため込んだ企業は、収入に対して支出(消費、労働分配、投資)が少ないので实体经济を低迷させる。次に、余った金を、食糧、エネルギー、土地などの投機的市場につき込み、その価格を上昇させ庶民生活を苦しめる。極めつきは、その投機に回った金が、株価や土地などを異常に高騰させ、ついにはバブル崩壊で経済破綻や金融危機を引き起こし、国に大損害を与えるということである。

そこで天下普請に学ぶべきことは、これらの悪事を働く悪大名の「たまった金」を、公共事業により、「天下のまわりもの」にすることである。経済成長期には、国民の貯蓄も含め「たまったお金」が設備投資に向けられ、それが次の成長をうながすために必要なものであった。しかし、成長が止まった今は、逆にこれが格差を拡大し、経済を低迷させている。よって、一般国民にも、江戸っ子にならない「宵越しの金は持たぬ」的生き方への転換が必要となる。公共事業も「金を増やす」から、「金をめぐらす」ための目的に変更すべきである。あえて批判を覚悟で言わせてもらえば、「たまった金を、(従来の概念での)無駄なところに使うからこそ、金があまねく天下をめぐり、低成長下においても安定した経済と社会を維持できる」のではないか。これこそ普請(あまねくこう)の原点である。